

あ と が き

前号において予告したように、阿波学会紀要は本号からA4判に衣替えした。それにともない、表紙の紙質（キクラシャ）やデザイン、版組み（2段組）、各ページの柱、論文題目・執筆者名の見出し部分、本文・図表の文字の大きさや表記法なども大幅に変更した。さらに、調査対象市町村についての全体図や統計データ・グラフを新たに挿入したこともあり、これまでの体裁を大幅に刷新することになった。大判化にともない、図版・写真などはこれまでよりも少し大きく掲載することができた。変更に際しては、紀要編集委員会で協議を重ね、さらに阿波学会理事会・評議員会で寄せられた意見も採り入れてはいるが、正直、会員諸氏の評価が大変気になるところでもある。ぜひ、新装なった紀要冊子についてのご意見を事務局宛までお寄せいただきたい。

また、後掲の「平成13（2001）年度阿波学会紀要原稿作成・提出規定」の「1. 4）原稿の長さ」にあるように、判型の変更にあたっては、規定ページ数（原則として1班12頁以内、原稿数が複数にわたる班については12頁に〔原稿数－1〕頁分を加算）を超過した場合には執筆者がそれを負担してもらうことも含め、規定ページ数を遵守してもらうべく各班の責任者・執筆者にはお願いをしてきた。これは、従来のB5判紀要（第35～47号）の場合でも、原則、刷り上がり1班15頁以内とする内規があったものの、実際にはこの間の13号分を平均すると毎号1班当たり1.2頁、合計頁数で20～30頁もの超過が常態化し、かつ班・執筆者によって執筆分量に大きくバランスを欠くケースがあった。紀要第43号（日和佐町）の場合には、本編（論文部分）だけでも399頁に及び、1班平均の刷り上がりページ数は18.1頁に達している。

編集委員会としても、調査内容が充実したものであればあるほど、その成果を紀要に詳しく報告したいという会員諸氏のお気持ちは痛感しているつもりではあるが、当然ながら、ページ数が嵩めばそれに見合った刊行費が必要となる。しかしながら、現実には印刷費はここ10年以上頭打ちであり、各班のバランスを考えたとき、総ページ数を総量規制しないことには、紀要を継続的に発刊することも難しく、やむを得ず、今回の措置をお願いをした次第である。この点で、会員諸氏のご理解を賜れば幸いである。なお、本号より「阿波学会紀要原稿作成・提出規定」を掲載したので、今後とも原稿執筆に当たって参考にさせていただきたい。

判型の変更ということもあって、今年度は編集委員会を5回開催し、編集委員ならびに事務局の方々には精力的に作業に携わっていただいた。しかし、いつもながら、委員長の不慣れや査読・編集作業の時間的制約・不手際もあって、執筆者の方々には原稿の修正依頼などに際してご迷惑をおかけしたであろうことが十分に拝察される。この点は率直に会員各位にお詫び申し上げるとともに、今後ともなお一層のご協力をお願いする次第である。

（平井松午）

阿波学会紀要編集委員会

委員長	平井 松午	副委員長	石田 啓祐			
委員	石尾 和仁	大川 健次	小川 誠	田中 省造		
	田村 栄二	伴 恒信	山本 茂	和田 賢次		